

中高6年間を見通したシラバスの作成（4）

ーライティングのシラバスー

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

平原 麻子・加藤 祐司・久保野雅史

末岡 敏明・鈴木 文子・寺田 恵一

八宮 孝夫

中高6年間を見通したシラバスの作成(4)

ーライティングのシラバスー

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

平原 麻子・加藤 祐司・久保野雅史
末岡 敏明・鈴木 文子・寺田 恵一
八宮 孝夫

本稿では、中高6年間を見通したライティング能力育成のシラバスを提案する。本校の「カリキュラム改革調査研究プロジェクト」にしたがい、6年間を2年ずつ「基礎期」「実践期」「発展期」の3期に分け、各期の到達・指導目標を決め、それを基に各学年の目標を具体的に設定した。また、今年度がシラバス研究の最終年度となったため、これまでの研究結果のまとめも同時に行った。

キーワード：中高6年間、シラバス、ライティング

1. はじめに

1995年度に始まった全校的な取り組み「カリキュラム改革調査研究プロジェクト—中・高一貫校のカリキュラム構成に関する基礎的研究」と連動して、本校英語科は、1998年度より「中高6年間を見通したシラバスの作成」という5ヶ年計画のプロジェクトに取り組んできた。このプロジェクトを立ち上げた理由は、

- | |
|---|
| (1)中高6年間を通して系統的・効果的にコミュニケーション能力を育成するには、6年間を見通したシラバスの作成が必要である。
(2)シラバスの検討・作成を通じて、教科内で指導目標・指導技術について共通理解を深める。 |
|---|

の2点である。

シラバスの枠組みとしては、6年間を基礎期(中学1・2年)、実践期(中学3年・高校1年)、発展期(高校2・3年)の3段階に分けて、各期における4技能別の到達目標を定める形になっている。

本プロジェクトは、以下のような5ヶ年計画で行われてきた。

- ・1年次(1998年度): 先行理論・実践の調査、リスニングのシラバス
- ・2年次(1999年度): スピーキングのシラバス

- ・3年次(2000年度): リーディングのシラバス
- ・4年次(2001年度): ライティングのシラバス
- ・5年次(2002年度): シラバス試案の完成、今後の展望

ここでは、昨年度、すなわち4年次の研究と実践の概要を報告する。また、後述(4.および7.で述べる)の理由により、本プロジェクトは4年次で終了することになったため、シラバス試案のまとめ、および今後の展望についても、この報告の中で行うことになった。

なお、1年次の研究については『筑波大学附属駒場中・高等学校研究報告集第39集』の「中高6年間を見通したシラバスの作成(1)—リスニングのシラバス」(鈴木文子他(2000))を、2年次の研究については『筑波大学附属駒場中・高等学校研究報告集第40集』の「中高6年間を見通したシラバスの作成(2)—スピーキングのシラバス」(寺田恵一他(2001))を、3年次の研究については『筑波大学附属駒場中・高等学校研究報告集第41集』の「中高6年間を見通したシラバスの作成(3)—リーディングのシラバス」(八宮孝夫他(2002))を、それぞれ参照されたい。

2. ライティングのシラバス

2.1. 本校のライティング・シラバス試案

本校で作成・検討を行ってきたライティング・シラバスの試案は以下の通りである。なお、これは作成当初のものであり、その後、表現や字句などの修正が行われているがその点については 4. で述べる。

(1)基礎期 (中学1・2年)

- (a) 綴り字と発音の関係 (フォニックス) を指導する
スペリングでつまづく生徒が数多く存在することを考えると、フォニックス等を取り入れて、綴り字と発音の規則性のある関係に注目させたい。
- (b) 文レベルの指導
語順-平叙文、疑問文、命令文などにおける語順に注目させたい。
- (c) まとまった文を書かせる
自己紹介、家族の紹介など。

(2)実践期 (中学3年・高校1年)

- (a) 2文以上書く練習
文と文のつながりに注目させ、連結詞 (connectives) の指導を行う。
- (b) まとまった文を書かせる
日記、手紙、学校行事の感想文など。教科書や会話のテキストをもとに簡単なオリジナルのスキットを書かせる。
- (c) 論理的な文章を書かせる
パラグラフライティングの基本の指導。
- (d) アウトラインをまとめて書かせる
サマリーライティングの基本の指導。

(3)発展期 (高校2・3年)

- (a)パラグラフライティングとサマリーライティングの系統的な指導
日常的な指導と休みの課題。
- (b)生徒の創造性を高めるライティングの指導
スキットや英文俳句等の創作。

このライティング・シラバス試案の6年間の流れの中には、

- (1)「単語→文→文章」へと発展する。
- (2)文と文のつながりを学び、構造のある文章 (パラグラフ構成) へと発展する。
- (3)身近な話題から始めて、より論理的、あるいは創造性を生かせる文章へと発展する。

という3つの柱がある。

2.2. 学習指導要領におけるライティングの扱い

ここでは、本校シラバスとの比較対象の一つとして、学習指導要領を取り上げる。

2.2.1『中学校学習指導要領』

中学校学習指導要領「第9節 外国語」の「第1目標」には、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。」と書かれており、「書くこと」という言葉が出てこない。「聞くことや話すことなど」の「など」に「書くこと」が含まれているのだとしても「書くこと」の比重が低いという印象を受ける。

「書くこと」に関する記述があるのは、「第2 各言語の目標及び内容等 英語」の「1 目標」と「2 内容」である。

1 目標

(4) 英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。

2 内容

(1) 言語活動

エ 書くこと

主として次の事項について指導する。

(ア) 文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意をして正しく書くこと。

(イ) 聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想や意見などを書いたりすること。

(ウ) 自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように書くこと。

(エ) 伝言や手紙などで読み手に自分の意向が正しく伝わるように書くこと。

2.2.2『高等学校学習指導要領』

次に高校の学習指導要領から「書くこと」に関わる記述を拾い上げる。

2.2.2.1. 英語 I

1 目標

日常的な話題について、聞いたことや読んだことを理解し、情報や考えなどを英語で話したり書いたりして伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミ

コミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

2 内容

(1) 言語活動

エ 聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどについて、整理して書く。

3 内容の取扱い

(1) 中学校における音声によるコミュニケーション能力を重視した指導を踏まえ、聞くこと及び話すことの活動を多く取り入れながら、読むこと及び書くことを含めた四つの領域の言語活動を総合的、有機的に関連させて指導するものとする。

2.2.2.2. 英語Ⅱ

1 目標

幅広い話題について、聞いたことや読んだことを理解し、情報や考えなどを英語で話したり書いたりして伝える能力を更に伸ばすとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

2 内容

(2) 言語の使用場面と働き

(略) その際、聞いたり読んだりした内容について、その要旨を書いたり、話し合ったりするなど、総合的な言語活動の場面を設けるよう配慮するものとする。「その要旨を書いたり、話し合ったりするなど」の箇所は英語Ⅰでは「自分の意見をまとめ、それを発表するなど」となっており、学習指導要領の中でどのような技能がより上位だとみなされているのかがわかる(編集者注)

2.2.2.2. ライティング

1 目標

情報や考えなどを、場面や目的に応じて英語で書く能力を更に伸ばすとともに、この能力を活用して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

2 内容

(1) 言語活動

生徒が情報や考えなどの送り手や受け手になるように具体的な言語の使用場面を設定して、次のようなコミュニケーション活動を行う。

ア 聞いたり読んだりした内容について、場面や目的に応じて概要や要点を書く。

イ 聞いたり読んだりした内容について、自分の考えなどを整理して書く。

ウ 自分が伝えようとする内容を整理して、場面や目的に応じて、読み手に理解されるように書く。

(2) 言語活動の取扱い

ア 指導上の配慮事項

(1)に示すコミュニケーション活動を効果的に行うために、必要に応じて、次のような指導をするよう配慮するものとする。

(ア) 話されたり、読まれたりする文を書き取ること。

(イ) 考えや気持ちを伝えるのに必要な語句や表現を活用すること。

(ウ) 文章の構成や展開に留意しながら書くこと。

イ 言語の使用場面と働き

(1)の言語活動を行うに当たっては、主として言語の使用場面と働きの例のうちから1の目標を達成するのにふさわしい場面や働きを適宜取り上げ、有機的に組み合わせて活用する。その際、手紙や電子メールなどの言語の使用場面を取り上げ、実際にコミュニケーションを体験する機会を設けるよう配慮するものとする。

(3) 言語材料

ア (1)の言語活動については、原則として、中学校及び高等学校の言語材料のうちから1の目標を達成するのにふさわしいものを適宜取り上げて行わせる。なお、言語材料は、現代の標準的な英語によるものとする。

イ 語は、「英語Ⅰ」の内容の(3)のイの範囲内で、1の目標を達成するのにふさわしいものを適宜選択し、連語は基本的なものを選択して指導する。

3 内容の取扱い

(1) 聞くこと、話すこと及び読むことも有機的に関連付けた活動を行うことにより、書くことの指導の効果を高めるよう工夫するものとする。

(2) 言語材料の学習だけにとどめず、情報や考えを伝えるために書くなど、書く目的を重視して指導するものとする。その際、より豊かな内容やより適切な形式で書けるように、書く過程も重視するよう配慮するものとする。

2.3. 海外のシラバス

具体的な行動目標が示されているという点で参考になるのがイギリスのThe National Curriculumである。ここではその中でライティングに関する箇所を引用する。

Attainment target 4: Writing

Level 1

Pupils copy single familiar words correctly. They label items and select appropriate words to

complete short phrases or sentences.

Level 2

Pupils copy familiar short phrases correctly. They write or word process items [for example, simple signs and instructions] and set phrases used regularly in class. When they write familiar words from memory their spelling may be approximate.

Level 3

Pupils write two or three short sentences on familiar topics, using aids [for example, textbooks, wallcharts and their own written work]. They express personal responses, [for example, likes, dislikes and feelings]. They write short phrases from memory and their spelling is readily understandable.

Level 4

Pupils write individual paragraphs of about three or four simple sentences, drawing largely on memorised language. They are beginning to use their knowledge of grammar to adapt and substitute individual words and set phrases. They are beginning to use dictionaries or glossaries to check words they have learnt.

Level 5

Pupils produce short pieces of writing, in simple sentences, that seek and convey information and opinions. They refer to recent experiences or future plans, as well as to everyday activities. Although there may be some mistakes, the meaning can be understood with little or no difficulty. They use dictionaries or glossaries to check words they have learnt and to look up unknown words.

Level 6

Pupils write in paragraphs, using simple descriptive language, and refer to past, present and future actions and events. They apply grammar in new contexts. Although there may be a few mistakes, the meaning is usually clear.

Level 7

Pupils produce pieces of writing of varying lengths on real and imaginary subjects, using an appropriate register. They link sentences and paragraphs, structure ideas and adapt previously learnt language for their own purposes. They edit and redraft their work, using reference sources to improve their accuracy, precision and variety of expression. Although there may be occasional mistakes, the meaning is clear.

Level 8

Pupils express and justify ideas, opinions or personal points of view, and seek the views of others. They develop the content of what they have read, seen or heard. Their spelling and grammar are generally accurate, and the style is appropriate to the content. They use reference materials to extend their range of language and improve their accuracy.

Exceptional Performance

Pupils write coherently and accurately about a wide range of factual and imaginative topics. They choose the appropriate form of writing for a particular task, and use resources to help them vary the style and scope of their writing.

3. 本校におけるライティング指導の実践

以下に本校におけるライティング指導の実践例を紹介する。昨年度までの報告の中ではリスニング、スピーキング、リーディングの各実践例を学年および担当科目ごとに網羅的に取り上げたが、今回のライティングの実践例に関しては網羅的な紹介になっていない。これは、網羅性よりも、各担当者がこの数年間の自分の指導実践の中から取り上げる内容を選ぶことを優先したためである。したがって、取り上げた学年や科目が重複していたり、逆に、取り上げられていない学年や科目があったりする。

なお、記述の中で「ライティング」という言葉が、科目としてのライティングを指す場合と、「書くこと」という意味でのライティングを指す場合との両方で使われているが、特に誤解のおそれが無いと思われる限り、混在するままにしてある。

3. 1. 基礎期(中学1・2年)

3. 1. 1. 中学1年(50期生) 担当:寺田恵一

ライティングの基礎期のシラバスは以下の通りである。シラバスと関連づけながら、昨年度の活動をまとめていきたい。

(a) 綴り字と発音の関係(フォニックス)を指導する
スベリングでつまずく生徒が数多く存在することを考えると、フォニックス等を取り入れて、綴り字と発音の規則性のある関係に注目させたい。

(b) 文レベルの指導—語順—平叙文、疑問文、命令文などにおける語順に注意させたい。

(c) まとまった文を書かせる—自己紹介、家族の紹介など。

3. 1. 1. 1. フォニックス

筆者(寺田)はここ数年フォニックスに関心を持って、特に入門期の生徒にどのように導入すべきか考えてきた。中1の生徒に詳細なルールを教えるのはかえって逆効果になるだろうと考え、母音と主な子音に絞って教えるようにした。松香(2000)、手島(1997)、竹林(1994)などを参考にして、まず母音については、「5つの短母音」と「語末にeのついた母音(アルファベット読みになる母音)」(松香(2000))について、次のプリント(No.16)を作成して生徒に説明し練習した。

英語の発音1	No.16
1. 短母音(短い母音)	
語末の母音字+子音字	
a. bag cat cap hat fan flag map	
has man	
b. pen jet shell	
c. dish king ink fish	
d. box pot rock	
e. cup sun hut	
2. アルファベット読みになる母音(二重母音)	
語末の母音字+子音字+e(語末)	
a. name cake tape gate game hate	
plane	
比較	
tape hate plane	
tap hat plan	

子音についてはまず一文字子音から始めて、その後sh, thなどいくつかの二文字の子音の練習に移ってい

った。フォニックスのルールには例外があり、特に日常頻繁に使用される語に例外が多いのは周知の事実だが、発音と綴り字の間に一定の合理的なルールが存在することを生徒に理解させるのは、有益であると感じた。また、フォニックスを教えることは発音を系統的に教えるという意味で、教師にとっても最高の自己訓練(松香(2000))になると思った。

3. 1. 1. 2. 単語テストとフォニックス

筆者は、生徒に単語のスベリングを覚えさせるために単語のテストを教科書(New Crown English Series 1)の各レッスンが終了するたびに実施している。3.1.1.1.で述べたように中学1年生にはフォニックスのルールの初歩しか教えていないので、この段階ではフォニックスのルールを学んでスベリングの修得に大いに役立つということにはならなかったように思う。

3. 1. 1. 3. 文レベルの指導

新しい単元や新しい文法事項を導入するときは、できるだけプリントを用いて各課のGrammar PointとGrammar Practiceを生徒に説明し練習させた。さらに各課の内容のポイントについて英問英答を用いた。英問英答はオーラルで行う場合と、答を英語で書かせる場合があった。

3. 1. 1. 4. まとまった文を書かせること

学期ごとに1,2回ずつまとまった文章を書かせた。1学期には教科書のLet's Write 1「自己紹介」(p.32-33)の課題として、全員に英語で自己紹介させた。次のプリント(No.11)を作成し生徒に英語で原稿を作成させ提出させ、私が添削して返却した後にスピーチを行わせた。

自己紹介(p.32-33の補足)	No.11
1.住んでいる場所	
I live in Setagaya Ward. / I live in Mitaka City.	
2.・・が好きである	
I like soccer. / I like soccer and baseball. / I like jazz. / I like pop music very much. / I like dogs. / I like cats.	
3.・・を演奏する(弾く)	
I play the piano. / I play the guitar. / I play the violin.	

4.・・・のクラブ(部)に属している

I am a member of the basketball club. /

I am a member of the baseball club.

5. 毎日、毎週()曜日に、・・・する

I play tennis every day. /

I play badminton every Sunday.

I practice kendo every day. /

I play volleyball every Saturday.

2学期にはショウアンドテルを行わせたが、1学期同様、作成した原稿を提出させて添削した後にスピーチを行わせた。

3学期には Let's Read 3 "A Letter from China" と Let's Write 3 「わたしの学校生活」に關係して次のような課題を生徒に出した。

課題

海外にいるペンパルに英語で手紙を書きなさい。手紙に以下の内容を入れなさい。手紙の長さは100語前後とする。

- 1) 自分の紹介
- 2) 自分の家族の紹介
- 3) 自分が住んでいる地域の紹介

以下は生徒の作品例である。

February 26

Dear Michael

How do you do?

My name is Yuya Onodera. I am a Japanese boy, living in Tokyo and 13 years old. My birthday is June 1st. I am a student of The University of Tsukuba Junior High School at Komaba. My hobby is juggling and reading books. What is yours?

I live with my parents and an elder brother. I like my elder brother because he is kind to me. How many members does your family have? I live in the east side of Tokyo, Koto Ward, where many canals run. There are many woods in Koto Ward.

I am looking forward to hearing from you soon.

Yuya

3. 1. 1. 5. Cloze テストの実施

各課が終わるごとに Cloze Test を実施した。内容は教科書の本文の空所補充問題である。平均して 10 語前後を空欄にしておいた。Cloze Test を行う前に通し

読みのテープを生徒に聞かせ、さらに本文の音読を何度も練習させた。

3. 1. 2. 中学2年 担当:加藤裕司

3. 1. 2. 1. 教科書の作文指導

中学2年では、1文レベルの作文指導は日常的に行っているが、ある程度まとまった英文を書かせる指導は教科書の課題に沿った形で指導した。また、スピーチ指導で、「自分のお気に入りの物」を紹介するという課題で、ALT とのチーム・ティーチングの時間の一部を割いて行っており、その原稿作成時にクリエイティブな作文を書く機会を与えている。

本校のシラバスでは、実践期で、「日記、手紙、学校行事の感想文など」のまとまった文を書かせることになっている。現在、中2で使用している New Crown English Series 2 では、以下のように「日記」、「夏休みの計画」、「将来の職業」について書かせる Let's Write というページがある。これらのページでは、モデルになる英文の一部を書き換えることで、作文指導を生徒の負担にならないように行おうとする工夫が見られる。

1. 日記

過去形の動詞を使う

Sat May 3, Fine

①My family went to Mt Nishidoke by car. ②We went for a walk in the woods. On the way we crossed a small river, Mother said, "Look at the pretty fish under the bridge. The water is so clean. We can see them clearly." ③I had fun today.

2. 夏休みの計画

I am going to ~、I will~ を使う

①This summer I am going to do a project about work at home. There is much work at home. Someone must cook, wash, clean and shop. ②I will practice cooking as my project. ③At the end of summer I will cook dinner for my friends. I will give my report to my teacher.

3. 将来の職業

I want to be~を使う。

理由を添える

Hello, everyone.

①I want to be a doctor. Do you know why?

First, ②I often think about sick people. There are many villages without doctors. So I want to

help people in those villages.

Second, some diseases do not have any cure yet. For example, some cancers. ③ I want to find a cure for them.

Thank you.

当該学年では、1と2は口頭発表の形で行い、3だけを書かせる形で扱った。

3. 1. 2. 1. 教科書外の作文指導

作文指導に関係あるスピーチ指導で、生徒が選んだテーマのうち、おもしろいテーマのものを以下に紹介する。

「マトリョーシカ」、「イチロー・新庄のサイン」、「ウサギのぬいぐるみ」、「トルコのものさし日本のものさし」、「黒い雨」、「中国語のドラえもん」、「ヨルダンで買った楽器」、「自作パソコン」など。

年度は変わって、現在（執筆当時）では次の学年が2年生になっているが、夏休みの宿題にNHKラジオ新基礎英語2を聞く課題を出した。その8月号の付録に夏休みパワーアップ問題集がついていた。問題集は宿題には含まれていなかったが、多くの生徒が自主的にやって提出した。その最終ページに「夏休みの思い出を英語で書こう」という課題がついていた。生徒のうち3分の1以上が自主的に書いてきたので、そのいくつかを提示して報告を終えたい。すべて、原文のままである。3人とも平均より上のレベルの生徒であるが、よく書けているのに驚かされる。

Y 君

1st September, 2002

I came back from Europe about three weeks ago. I went there with my grandfather. I had good time and saw beautiful sight.

First, I went to London. London has a lot of histories. I went to Big Ben, Saint Paul and Piccadilly. Second I went to Paris. I went to Notre-Dame, Louvre and tower eiffel. I ate escargot. It was very delicious.

Third, I went to Roma. I went to Vatican Palace. It was very giant and very beautiful. I went Colosseum. I was surprised that it stand many years.

I went many place in Europe. It was very interesting. I want to go there again.

E 君

11 August, I went to Malaysia with my family. The second day, we saw the sights of Penany Island. (We arrived there in the first day at 23 o'clock.) We went to the Stand to eat in the evening. But it wasn't open. Becuase it was too early. So we ate on the restaurant Ship. It was delicious! When we came back from the Ship, I saw various stands were open. CD-stand, game-stands, brandgoods-stands, etc. But most was imitaion!! Can you bilieve it?

The third day, we left to the Payar Island by ship. But I got seasickness. I was bad. But we arrived there when, I got well. Becuase, the sea is so Beautiful!

When I began snorkel, I saw very many fish were swimming, and there were corals and sea qucumbers in the sea.

When I threw a piece of bread into the sea, very very very many fish came to me. I felt like I was swimming in the aquarium. I tried to catch the fishes by my hand, but I couldn't. They were very fast!

This trip was very nice to me.

M 君

End of July, 2002

I came back from China the day before yesterday. In China, I could see four world heritages. And, I learn Chinese history and culture. It was one week that it was interesting for me.

First, I visited to Shanghai. The city is the greatest modern city in China. I surprised to see that Shanghai like Tokyo. At night, I got on the night train from Shanghai to Luoyand.

Second, I arrived Luoyand at noon. I went to Lonmeng. It is a world heritage. This day, I want to Bamar temple. It is the oldest Buddhist temple in China.

Third, I went to Xian by bus. I visited Sanmenxia on my way. I could see Kaku country's ruins there. It is king's grave at B.C.7. I arrived Xian at around 5 p.m. I ate many kind of Gyoza for dinner. It was very delicious.

Fourth, I went to Heibayoko. I saw a lot of

soldier doll witch made of soil. It was very impressive for me. This ruins is one of the eight world miracle. In the afternoon, I went to Beijing by plane.

Fifth, I went to Kokyu castle. It is the largest castle in the world. I could meet nephew of last empelor. He write a Chinese calligraphy very well. Next day I came back to Japan.

I want to go to Middle District and Guilin now.

3. 2. 実践期(中学3年・高校1年)

3. 2. 1. 英語 I (52期生) 担当:久保野雅史

3. 2. 1. 0. 創造的スピーキング活動「有名人架空インタビュー」に向けたライティング指導

3. 2. 1. 1. 実践期シラバスとの関連

実践期のライティング・シラバスは、

- ①文と文とのつながりに注目し、2文以上を書く練習を行う。
- ②まとまった文章を書く。
- ③パラグラフ・ライティングの基礎を学び、論理的な文章を書く。
- ④アウトラインを作成し、それをもとに文章を構成する。
- ⑤基本的なサマリーライティングの練習を行う。

である。ここでは①②⑤を目指した実践を報告する。

ただし、ライティングそのものを最終目的にした活動ではない。スピーキングに付随するライティング(incidental writing)である。これは、中学・高校のライティングはスピーキングと関連づけて指導する方が有効だ(久保野 2002b)という考えに基づいている。

3. 2. 1. 2. 教科書から創造的スピーキング活動へ

英語 I の教科書 *Unicorn English Course I* には、アメリカの映画監督 Steven Spielberg の雑誌インタビューが掲載されている。これをモデルに「有名人架空インタビュー」というスピーキング活動を思いついた。司会者とスターのやりとりのモデルとしては、NHK で不定期に放映されている「アクターズスタジオ・インタビュー」を利用した。

生徒は二人組になり、司会者とスターの役割を演ずる。基本的には台本を作成し、それを暗記して臨むロール・プレイング活動である。この台本作成が一つのライティング活動であるが、その手前にも「スターのプロフィールを作る」というライティング活動を配置した。準備の手順は次の通りである。

①取り上げるスターを決める。

(洋の東西、存命、実在かは問わない)

②質問項目を考える。

③百科事典、インターネット等で情報収集する。

④教科書をモデルにプロフィールを書く。

⑤プロフィールを基に問答台本を書く。

一組の発表時間は2分以内とし、全員(21組)が50分以内に発表できるようにした。また活動の様子はビデオ収録し、表現の能力(スピーキング能力)を評価する資料として利用した。

ただ書かせようとする、日本語でプロットを書いてそれを英訳することになりがちである。それを防ぐために、まず、自分が司会者だったら質問してみたい項目を三つ英語で書き、それに関する情報を、*World Book* 等の英文百科事典や英文ホームページで収集する。このステップの目的は、必要な情報を収集することだけではない。プロフィール執筆の際に役立つ表現を収集し、それを真似て書く(いわゆる英借文する)準備すること、これも重要な目的の一つである。

プロフィールのモデル(上記④)となったのが、教科書課末にある本文の要約である。

When Spielberg was a youg boy, he had a lot of the same fears that most kids have. His childhood was full of scary experiences. When he was twelve, he became the family photographer and dramatized everything.

(後略) ※太字は引用者による

これは、第三者の目から見た記述なので、自分がプロフィールを述べるモデルには適さない。そこで、次のような一人称に記述スタイルを変更した。

When I was a youg boy, I had a lot of the same fears that most kids have. My childhood was full of scary experiences. When I was twelve, I became the family photographer and dramatized everything. (後略) ※同様

これを基に、各組がスターのプロフィールを書いた。

司会者の切り込み方は「アクターズスタジオ・インタビュー」を見せた際に、「これは使ってみたい」という切れ味のよい表現をメモして、積極的に模倣することを奨励した。ここまでに至る教科書の扱いについては、久保野(2002a)を参照して頂きたい。

生徒達が選んだスターは、映画俳優・プロスポーツ選手・ロックミュージシャン・歴史上の人物等、多岐に渡った。そのうち大相撲の元大関 KONISHIKI との

架空インタビューの様子は、愉快的仲間たち(2003)のDVDに収録されている。

3.2.2. 英語 I・II (50期生) 担当:平原麻子

本校では高校1年生で英語 I (3単位)とOCB (2単位)、高校2年生で英語 II (4単位・うち1単位は外国人講師とのチームティーチング)を全員が学ぶ。英語の授業は2年間でこの9単位時間のみである。この中で4技能のすべてを扱わねばならない。英語の授業時数としては少ないほうだろう。効果的な習得を目指すためには、しっかりした年間指導計画のもとで授業を運営していく必要がある。次にライティングについて、2年間を通じてどのような段階を追って指導していったかについて述べる。なお、50期生が使用した英語 I・IIの教科書は SPIRAL ENGLISH (一橋出版)であった。

3.2.2.1. 文法指導

高校に進学して初めて出会う文法事項が多岐に渡るため、ライティングといっても、まず基本的な文法事項の習得練習から始まる。本校は文法だけを取り上げて学習する時間を時間割上に設けてはいない。筆者の場合は適宜、文法を集中的に取り上げる期間を学期中に設定し、教科書の文法事項配列になるべく沿う形で、適語補充・語形変化・和文英訳などを盛りこんだハンドアウトを自作して指導にあたった。この文法指導で配慮したのは次の2点である。

- ①ターゲットの文法事項を盛り込んだ短い和文英訳は、まず口頭で言わせる。作文練習をすると生徒はすぐに書こうとするが、いつも紙と鉛筆に頼っているようでは実際の場面で運用できるようにならないからだ。
- ②ある程度新出文法に慣れてきたら、なるべくオープンエンドな文を作る練習をする。(例: 仮定法の II 節だけを与えあとを自由に続けさせる、関係詞を使った定義文を作らせる、過去のある時点までの経験を述べさせる、など)

こういった文法指導は英語 II を終える高校2年生の最後まで続けた。文法はその形を理解するだけでは不十分である。実際に話したり書いたりできる段階まで運用力をつけさせることが肝要で、そのためにはかなりの指導時間を要する。

3.2.2.2. パラグラフライティングの指導

1) 高校1年次

1学期の段階で、英文の基本的な構成を topic

sentence、support sentence、conclusion といった述語を紹介しながら説明し、ばらばらになった文を並べ替えパラグラフに再構成する練習や接続詞の使い方の練習などを行った。パラグラフの最初にはインデントをつける、とか、箇条書きは文章ではない、といったごく基本的なメカニクにも言及した。意外とこういうことが最後までできない生徒がいるものだ。

この導入期を経た後、まとまった文章を書く機会を2回もうけ、主に時系列で何かを語る文章や物事を描写する文章の指導を行った。課題は以下の通りである。
<課題1> April in Japan・April in My Town・April in Tsukukoma の中から好きなタイトルをひとつ選び8文程度のパラグラフを書く

<課題2> The Most Enjoyable Experience in My Junior High School または The Book That Has Most Strongly Impressed Me のどちらかを選び8~10文程度のパラグラフを書く。あわせてアウトライン作りも指導。

教室では生徒が実際に書いた文章を取り上げ、よりよくするためにはどう変えればよいかを考えさせる授業も行った。またこの時期、他教員による OCB の授業では校外学習を題材にしたスピーチライティングの指導を展開している。

夏休みには全国高等学校生徒英作文コンテストへの参加を奨励し、2学期以降は次の3つの課題でまとまった文章を書く機会を作った。書く文章のジャンルを意識的に広げていった期間である。また、教員に提出する前に生徒同士がお互いの作文を読みあつてアドバイスをしあう、ピアコレクションの時間を取る試みもおこなった。

<課題3> My Summer のタイトルで、トピックをひとつに絞り時制に気をつけて書くよう指導。

<課題4> グループで日本映画の1場面(「男はつらいよ」より)を英語のシナリオに作り替え、演じる課題。日本的な表現をどう英語で表すか、友人とアイデアを出し合いながらの共同作業を体験させた。

<課題5> My Resolution for the Year 2000 のタイトルで説明文の初歩を指導。

2) 高校2年次

高校2年生での指導の主眼は「自分の意見を書く」ことである。意見文はそもそも自分の意見や考えがないことには書けない。そこで、実際に文章を書かせる前に丁寧なリーディング指導や友達との意見交換などの時間を取った。また、意見文の基本的な枠組みで使

用する語彙 (I agree with…、First、Second、In addition 等) の指導を重視した。限られた授業時間数のためライティングに十分な時間をさく余裕がなく、主にまとまった休みの期間を利用して宿題の形で取り組ませることが多かった。高校2年生でのパラグラフライティングの課題は以下の通りである。

〈課題1〉遺伝子革命に関する500語ほどの小論文を読み、筆者の主張に対する自分の考えを述べる。

〈課題2〉The Most Impressive Thing during the School Trip. というタイトルで修学旅行のできごとを描写する。

〈課題3〉日米文化比較に関する1000語程度の小論文を読み、書かれていない最後の結論の部分を全体の論旨を踏まえて創作する。

このほか、普段の授業で小説 (*Harry Potter and the Philosopher's Stone*) の一部を原文で読み要約を書く練習などにも取り組んだ。また、他教員によるTTの時間にはディベート指導が行われた。

書くだけで終わらず、他生徒との意見交換やプレゼンテーションに発展させることがライティング指導のゴールであろう。その点で、限られた時間数の中、十分な取り組みができていないとはまだ言えない。今後さらに工夫を重ねていきたい。

(本来、高校1年生は実践期であり、高校2年生は発展期に相当するが、担当者が英語Iと英語IIを2年続けて担当し、その実践報告をまとめて行っているため、この報告の中では2つの学年をまとめて実践期の中で取り上げた。編集者注)

3. 4. 発展期(高校2年生・高校3年生)

3. 4. 1. 英語II(51期生) 担当: 末岡敏明

3. 4. 1. 1. はじめに 英語IIの位置づけ

高校2年生は発展期の1年目である。発展期の2年目となる高校3年生には「ライティング」という独立した科目があるが、高校2年生は英語IIの中でライティングの活動を行うことになる。高校3年になれば本格的なライティングの授業があるのだということを前提とすると、6年間のライティング・シラバスの中で、4技能を総合的に学ぶ英語IIの果たすべき役割は何なのだろうか。

基礎期と実践期の4年間で生徒はパラグラフ・ライティングの基本まで学習を進めてきている。そこで、発展期の1年目はパラグラフ・ライティングの知識を実践に応用し、それまで以上により規模の大きな、そして、より本格的な文章を書くことへの導入という位

置づけになるだろう。様々な文章作成技術の向上は高校3年での学習に期待し、高校2年の段階では、語数の多い文章を書くことに慣れ、創造的な文章を書く楽しさを知る、ということに重点を置いて指導するのである。

もちろん、高校2年生の時点では文法・語法的知識が十分とは言えない。「文章」以前の「文」の段階でもまだまだ問題点を残しているというのが実状である。そこで4技能を総合的に学ぶ英語IIの特徴を生かし、日常的な様々な学習活動の中で文法・語法的知識の定着を目指し、それと平行して、できるだけ長い文章の作成に慣れさせる指導を行うという形になる。

なお、発展期のライティング活動としては、

①パラグラフライティングとサマリーライティング

②生徒の創造性を高めるライティング

の2つがシラバスに記載されているが、ここで報告するのは基本的に「創造性を高めるライティング」に絞り、必要に応じてパラグラフ・ライティングについてもふれることにしたい。

3. 4. 1. 2. たくさん書かせる工夫

発展期の活動なので可能な限り「大がかりな」ライティング活動をやらせたい。しかし、他にも学ばせるべきことがたくさんある状況の中で、英語IIの枠内でライティングのためのまとまった時間を確保するのは容易なことではない。結果から言えば、2001年度は各学期に1回ずつ大がかりなライティング活動を行うことができた。英語IIの授業内ではこれが限度ではないだろうか。

ここで「大がかりな」というのは300語~500語程度(あるいはそれ以上)の英作文を指す。語数がこのくらいになると、内容としてかなり多くの要素を備えなければならなくなり、内容が多くなれば文章の構成(話の展開)をよく考えなければ書けなくなる。最低でも3つ以上のパラグラフから構成されていて、どのように導入し、どのように本論を展開し、どのように文章をまとめるかを十分に検討しなければ体裁の整った文章にならないというのが、この規模の作文である。

しかし300語~500語程度というと、教科書の1課分あるいは大学入試問題の長文に相当する分量である。生徒が受ける負担感も当然大きなものとなる。そこで、生徒がたくさん書けるような課題の与え方を工夫する必要が生じてくる。

まず、生徒が実際に体験したことや知識を持っていることを話題にできるような課題を与えるというのが

一つめのポイントである。これによって「何について書けばよいか」を考える時間が少なくてすむ。また、自分が詳しく知っていることについては多くを語りたくなるものである。

次に大事なことは、早めに課題の概要を生徒に伝え、書く内容の調査・検討のための時間を多く確保する、ということである。それによって書くべき内容が多く集まれば文章も長く豊かになる。ここで「早めに」というのは具体的には課題提出日の1ヶ月前を目安とした。実質3ヶ月しかない学期の中で1ヶ月前というのはかなり早い時期であるが、生徒は他教科の課題や行事などやるべきことをたくさん抱えている。1ヶ月前でも遅いくらいかもしれない。

3.4.1.3. 手段としてのパラグラフ・ライティング

パラグラフ・ライティングの発想と技術は確かに重要であるが、パラグラフ・ライティングの形式を守ることが最優先項目であるかのような作文指導は本末転倒である。書き手が持つメッセージを読み手に効果的に伝えるための手段としてパラグラフ・ライティングの発想で文章を構成していくことが有効であるのは事実であり、その点を生徒に十分理解させることこそが重要なのである。

そこで、実際に生徒が作文を書き始める段階になったら、まず下の①から④のポイントを確認させた。実際の授業では、課題提出期限の2週間前ごろにこれをプリントとして配布し記入させた。どの項目もごく短い日本語で書けばよい。

- | |
|----------------------|
| ①何について書くのか |
| ②それについてどのようなことを述べるのか |
| ③文章の最初に何を書くか |
| ④終わりに何を書くか |

文章を書き始めることができない生徒は、たいていの場合、この4項目を挙げることができない。逆にこれらすべてを書ける生徒は、実際に文章を書き始めることができる。文章全体のパラグラフ構成をすべて設計してから書き始めるというのは、教科書的には理想的な形なのだろうが、この4項目を決めた段階で文章を書き始め、あとは、文章を書きながら、あるいは書き直しながら（特に項目②に相当する内容に関して）必要に応じてパラグラフを整えていく、という方が現実的だと思われる。

3.4.1.4. 1学期の課題

本校の高校2年生は5月に修学旅行に行く（本校で

は「校外学習」と呼ぶ）。そこで、1学期の課題は「校外学習で知ったことや体験したことを書く（300語以上）」とした。この課題で生徒に与えた指示は、

- ①話題は一つのことに絞る。
- ②ワープロで印字して提出する。
- ③本文に関係のある写真を1枚付ける。

の3つである。①は、時系列で出来事をだらだらと書き連ねるような文章を書かせないためである。また、②と③は、作文を「作品」として提出させるためである。フォントやレイアウトを工夫し、写真を加えて楽しい作品にする。それを後でお互いに鑑賞して意見を言い合う。この活動によって「文章はメッセージを人に伝えるために書くのだ」ということが実感できるのである。

以下に生徒の作品の例を示す。

Suigyo at Ryusenji temple

After the long 1.5 hours' ride on a bus, we arrived at Ryusenji temple. It was quite a beautiful temple, which had a fine gate in front and colorful plants in its garden. They were not what we came here for, though. Our aim was to try *Suigyo*, an ascetic training in which we stay under a waterfall or in a pond so as to make ourselves strong mentally by enduring the water pressure and coldness. Of course, this was the first time for every one of us to try *Suigyo* and was probably the last time too for most of us, our heartbeats were getting faster and faster. Personally, this was one of the two highlights of this tour (the other was climbing Mt. Hiei).

First, we went to *Jimusho*, which was a kind of an office of the temple, to borrow *Gyoi*, which is what we wear when we do *Suigyo*. (以下略)

この文章は800語を超える大作で、情景描写と心理描写が上手に織り込まれてなかなか「読ませる」文章になっている。なお、写真には滝に打たれて水行をしている生徒の姿が写っている。

3.4.1.5. 2学期の課題

2学期の課題は「有名人を紹介する文章を書く（300語程度）」とした。「有名人」に限定したのは、友人や先生などの身近な人物を排除するためである。誰にでも詳しく知っている有名人が一人や二人はいるので、これは生徒にとって気楽に書きやすい課題であるといえる。今回は、

- ①その人物の略歴
- ②その人物の具体的なエピソード
- ③その人物を自分はどう思うか

の3つの要素を文章の中に必ず含めるという条件を与えた。条件を与えると課題の難易度が上がるような印象を受けるが実際には逆である。書くべき要素がはっきりするので、むしろ文章は作りやすいのである。

次に生徒の作品の例を一つ示す。

Keita Goto

Keita Goto is a founder of Tokyo Railway and its group. He was born in Nagano in 1882. (略)

He was called Robber Keita because he took over many companies. In Japanese, "Goto" is pronounced "go-toh," which has a similar sound to the word meaning "robber." When he died, mass media wrote that he went to hell to take over the hell.

However, the eagerness to his work was inferior to nobody. When the Great Kanto Earthquake happened, Meguro Kamata Electric Railway suffered destructive damage. But Keita Goto, who was the managing director went to the working spot, had the shovel, and continued doing restoration work by the all-night sitting. Then it resumed normal service in several days. It was useful for the revival after the earthquake disaster.

I think that the excellent leadership in which Keita Goto commanded a big company is wonderful. By his enterprise deployment, the Musashino district received the big benefit.

今回の課題では、どの生徒も、略歴とエピソードの部分は比較的良好に書けていたのだが「その人物を自分はどう思うか」の部分に関しては不十分な記述が多かった。ほとんどの生徒が「素晴らしい人だ」と書くだけで、どのように素晴らしいのかが十分に説明できていない。また、そもそも人物を評して「素晴らしい」という形容詞しか出てこないのは発想が貧困であると言わざるを得ず、この点をもっと検討する時間を与えるべきだったと思われた。

3. 4. 1. 6. 3学期の課題

生徒たちは2学期の課題に興味を持って取り組んでいたようであるし、結果として提出された作品も面白

い内容のものが多かったので、3学期はさらにそれを発展させた課題にしようと考えた。

そこで3学期の課題は「自分が批判したい有名人について書く(300~500語程度)」とした。誰にでも批判したい人物はいるので、今回も話題選びには困らないはずである。今回の条件は、

- ①文章はすべて客観的な事実で構成すること。
- ②「嫌いだ」のような感情や、「悪い人だ」のような主観を述べた文は書かないこと。

という2点である。これは、2学期の課題で「素晴らしい」と書くだけでその根拠に関する記述が不十分だったことを受けて、今回の課題では、批判することはあくまで前提であり、批判の根拠の部分だけを書かせようという仕掛けにしたということである。

生徒の作品例を一つ示す。

Debt

Takuboku Ishikawa is one of the most famous poets in Japan. We can see poems in a textbook. Though he seems to be filial piety and a man of the world, to tell the truth, he wasn't the person whom we imagine.

(略)

Takuboku recited in "Ichiaku no suna" that even if he worked a lot, his life wouldn't improve. But, in fact, he didn't work very much. And it isn't too much to say that all his life was a debt. He often borrowed a lot of money from his friends who showed understanding in him. As soon as he had some money, he spent their money to eat *katuretu* and to drink alcoholic drinks; therefore he could never repay it to them. And he was examined on a charge of embezzlement by public prosecutors in 1906 because he didn't repay to his friends. His friend, Kyosuke Kindaiti, was so kind that he lent a lot of money to Takuboku. As he lent too much, he went a pawnshop and managed for money. In a short time, he began to go bankrupt because of Takuboku.

(略)

最初、生徒たちはどのようなスタンスで文章を書けばよいのかわからずに戸惑っていたようであるが、批判したい項目を具体的に挙げていき、それらを配列していくうちに、自然とパラグラフ・ライティング的

な発想で文を構成していくことができたようである。

3. 4. 1. 7. 評価について

最後に、提出された作品に対する評価について簡単に述べておく。評価の観点には以下の通りである。

- ①決められた指示と提出日を守ったか。
- ②読み手が内容把握をしやすいように段落構成されているか。
- ③読み手を楽しませようという気持ちが表れているか。

②と③をまとめると「読み手のことを考えて書いているか」ということになる。文章を書く上で最も大切なのは「読み手にメッセージを伝えるために書いているのだ」という意識を持つことだ、という考えからこのような評価の観点を設けた。語法・文法上の間違いなどについては一切評価の対象とはしなかった。

③について補足説明をしておくと、この観点は、常識的な内容や個人の趣味に偏った内容を書くのではなく、「読み手を感じさせよう」「読み手を驚かそう」などの意識で書かれている作品に良い評価を与えるということである。

3. 4. 2. ライティング(50期生) 担当:八宮孝夫

3. 4. 2. 1. はじめに

本校では「ライティング」は高校3年で扱い、3人の教員が3単位の授業の1単位づつを分担することになっている(現在では2人の教員が2単位の授業を1単位ずつ受け持っている一編集者注)。従って同じ教員団が4クラスを担当するが、それぞれの教員は週1時間しか授業がない。1学期に10回前後である。筆者の分担は、この時間にある程度の長さの「ひとまとまりの英文」を書かせることであった。本稿ではその実践について述べる。

3. 4. 2. 2. 「ひとまとまりの英文」を書かせるために

田島(2000)にあるように、ひとまとまりの英文を書かせるといってもテーマが自由であると生徒数文の異なる作文を見ることになり、ライティング指導は事実上不可能になる。「何について書かせるか」は教師の側でコントロールしないといけない。あることの描写や説明などは書くことが決まってくるから厳密なコントロールであろうし、あることについての意見や印象などはさまざまなバリエーションが出ることが予想され、緩いコントロールといえよう。1学期は前者を中心に2学期は後者を中心に行った。

3. 4. 2. 2. 1. 物語の描写(description)

ライティングの教科書にはほとんど取り上げられていないが、イソップなどのよく知られた物語を書いてみる、というのは「ひとまとまりの英文」を書くのにいい練習になる。筆者は「ウサギとカメ」を取り上げた。まず、分量的にそれほど長くなく無理がない。また1994年度版『基礎英語I』3月号でも扱われたように、中学1年の文法力でも書くことが出来る。もちろん、いきなり書かせるのではなく、前段階として類似した別のイソップ寓話をまず読ませた(キツネがツルを食事に招くが、食べにくい容器で出したために、後でツルがキツネを招き返しをする話)。内容とともに文の展開にも注意させた。すなわち、イソップには次のような展開パターンが多い: 1)(起)A,B 登場 2)(承)AがBをやりこめようとする 3)(転)逆にBがAをやりこめる 4)(結)教訓。書かせる際には、最低限含めるべき要素を明らかにするために以下の指示を出した:「ウサギとカメが競走した。ウサギが途中で居眠りをし、その間にカメが追い越し、ついに勝ったという流れを含めて100語程度の英語でまとめなさい。」因みに、書き出しの文は”Once upon a time there lived a hare and a tortoise.”として与えておいた。この文章を書かせてわかったことは、文章は結構平易であるが、時制を一定に保って書くことが苦手である(過去形の中に急に意味もなく現在形が紛れ込んだりする)ということだ。それとa hare/a tortoiseをずっとこの形で使い続け、既出のものにはtheをつけるというような談話に絡むような要素も充分活用していないことであった。従って、課題を返却した際には、これらのことに言及し、動詞の時制の再確認などをした。面白い発見もあった。「ウサギとカメ」のように有名なものは、あまり筋について大きな差はでないと予想していたが、意外と細部において異なったバージョンがでてきたことだ。一例挙げる(生徒に配布したプリントからの例で、文法上の誤りなど最低限の修正は施してある):

Once upon a time, there lived a hare and a tortoise. The hare always despised slowness of the tortoise. So the tortoise got angry and told the hare to compete with him in running.

They started. The hare ran faster. The hare stopped to turn and look back at the tortoise. “The

tortoise was is far behind me to see. I have plenty of time. "So I can sleep." The hare said and fell asleep.

The tortoise kept walking and saw the hare sleeping. "It's a chance" said the tortoise. Some time later, the hare woke up and looked behind but he couldn't see the tortoise. "He is too late," said the hare. But, to his surprise, when the hare looked ahead, he found the tortoise had already finished running.

The hare cried so much that, since then, the hare's eyes have always been red!

この例は、ウサギの目がなぜ赤くなったかの由来で終わっている点でユニークである。また、基本的に地の文を中心に書いたものと、ウサギとカメの実際の対話形式で書いたものと大きく分けて2種類あり、それを生徒に提示し比べさせるのも、表現法の違いという点で有益だったと思う。

3. 4. 2. 2. 2. 定義文(definition)など

こちらの方は、物語の描写よりも容易そうであるが、定義に必要な要素を含めて比較的短く簡潔にまとめなければならない点で、むしろ難易度が高いといえる。はじめは、大学入試にある1行程度で定義できる例を出して練習させた。例えば *A nurse is trained/sick or injured/hospital.* これは与えられた語彙をこの順に用いながら、不足語を補う、というものである。ある意味文法問題と取れなくもないが、文法問題より緩みがあり、誘導作文(guided composition)に近い。この1行定義に慣れたら、数行に渡るものを扱った。例えば「おにぎり」について定義させる。これも上と同じように使用すべきいくつかの語句を提示しておく。これにより、学習者の書く英文に一定の制限を与えながら、しかしいくつかのバリエーションの出来る緩みを残すことができる。実際に書かれたものの中から、いくつか典型的なものを印刷し、『和英日本文化辞典』などの例も添えて、生徒に読ませ比較させた。

定義文以外に書かせたものとして「4コマ漫画」の英文による内容説明がある。これは、絵から吹き出しに入る台詞を想像させてそれを書かせる場合と、話の流れを英語で説明させる場合がある。「ひとまとまりの英文を書く」という点では後者の方が目的になかった

課題ということが出来る。

これまで3つの活動例に触れてきたが、共通するのは、描写なり説明なりする対象を提示し、場合によっては使用すべき表現も与えておきながら一種の誘導作文をさせる、ということである。和文英訳では日本語に引っ張られてそれに対応する英語表現を考えるとという弊害があるが、上の課題では対象が物語の筋や絵ということで、直接日本語が間に入る余地が低められる点で、より実際の言語使用に近い活動といえよう。

3. 4. 2. 2. 3. 要約文(summary)

これまで述べてきた描写や説明は、与えられた対象を言葉によっていわば「引き伸ばす」作業であるが、要約は与えられた対象を簡潔に「縮める」作業である。読んだ内容を要約する場合と、聞いた内容を要約する場合がある。要約が目的であるから、与えられた内容は平易で理解しやすいものでなくてはならない。筆者の場合は米国放送 VOA (Voice of America) の *Words and Their Stories* という番組を利用した。この放送は外国人向けに選択された1400語の基本語彙で作られ、英語のスピードも通常放送の3分の2に落としてありながら、不自然な英語ではなく内容的にも質を落していない点に特徴がある。毎回ある言い回しの意味とその由来について5分間放送するもので、要約としては意味とその由来がつかめればいいことになる。そこで要約の助けになるような英語の質問を事前にいくつか用意しリスニングポイントとして与えた。読み物の場合は目に入る未知の語が気になるものだが、放送の場合はリスニングポイントに集中することによって枝葉末節は気にならなくなる。筆者が聞いた内容を要約する課題を選んだのは以上の理由による。

具体的には、例えば”keep up with the Joneses”という表現の説明をテープで2度かけ、内容に関する英語の質問(これが要約の骨子となる)に答えさせる。全ての生徒が正しく理解したとは限らないので、質問の答えを確認し、まとめとしてもう1度テープをかける。質問の答えに基づいて要約文を書かせる(その際、つなぎの言葉などに注意させる)、という流れである。この課題の場合、1番目に”What is the American dream?”という質問を持ってきたために、生徒の要約がかなり American dream に割かれ、肝心の”keep up with the Joneses”の意味・由来がややボケてしまった要約文が多かった。適切な質問を用意する大切さを痛感したものであった。もちろん、最終的には質問の補助なしで要約文が書けることが目標である。

3. 4. 2. 2. 4. 論説文(argumentative passage)

ある話題について自分の意見や主張を論理立って述べるもので、共通の話題という限定性はあるものの、議論の展開のなどは個々の生徒によって異なるため自由度があり、ライティングとしては段階が進んでから行うべきものである。とはいえ、これもいきなりある話題を与え、意見を述べよというのは無茶である。筆者の場合はまず”Advantages and disadvantages of the lecturing method”と称する文章を読ませ、講義形式の授業の利点欠点を分類させた。また、教育評論家の立場の意見・学生の立場の意見の違いにも留意させるようにした。そしてその文章の筆者の主張は何かを考えさせた。つまり、実際の論説文の分析から始めたのである。これによって、分析ばかりでなく、論理の展開や、その際の重要表現なども学ばせることが出来る。

その後、新聞紙上でも取り上げられ比較的関心の高い話題を探した。当時話題になっていたのは「近鉄バッファローズのローズ選手がホームラン新記録をねらったところ、相手投手が四球を出して阻止するのは如何なものか」というものだった。英字新聞にも是非論が飛び交っており、与える資料も豊富にあった。論説文を書かせる際には、なるべく多くの資料を与えるということが重要だと思う。あまり資料のない話題であると、生徒の意見は根拠のない感想のようなものになってしまうことがあるからだ。資料が多ければ、生徒はその中から自分の論理展開の根拠になるような事実も見つけられるし、また使用すべき表現なども拾い出すことが出来る。具体的に用意したのは「プロ野球コミッショナーの意見」「ローズ自身の意見」「ジャパントイムズの論説」「読者の投書欄の意見」などで、なるべくいろいろな視点のものを与えた（生徒自身が調べればさらに良い）。これもまた、生徒の作品でよくかけているもの、典型的なものを印刷し配布した。

3. 4. 2. 2. 5. 印象文(impression)

共通のテーマは与えるものの、印象というのは将に個人個人さまざままで、その点で自由度が最も高いものであろう。筆者が与えた課題は「”What impressed me most in high school life”の題で英文を書け」というものだ。最初に述べたことだが、生徒数と同じだけ異なった作文が出てきた場合、事実上作文指導は不可能である。にもかかわらず、これを取り上げたのは、高3の最後の2時間の授業であり、作文指導というより、それぞれどんなことが印象に残ったかをただ書くだけ

でなく、クラスの前で発表させ、お互いの感想を share させようと考えたからである。それなら、なるべくバリエーションがあった方が楽しい。実際、いろいろな印象文があったが、どのクラスでも一番多かったのは学校行事（とりわけ高3の文化祭）、続いて部活動、友人、授業、教師などで、その比率は全クラスほぼ共通していた。この課題では事前にクラス発表させる旨を伝えて、聞き手に分かるような表現を用いることに留意させた。机間巡視をし、安易に和英辞典を引かせず、別の表現を考えさせた。発表は1人1分という短いものであったが、生徒が3年間共有してきた出来事の発表でもあり、裏話や失敗談ありで聞く側も非常に集中して聞いており、予想以上の発表会となった。一例をあげて、筆者の実践例を閉じることにする（この例では、男子校である勤務校の文化祭のイベント「ミス駒場」に出場して敗れたことをユーモアを持って述べている）。

What impressed me most in Tsukukoma high school life is the school festival of this year. And among other programs, “Miss Komaba” was especially impressive.

It is the traditional event in which the most girlish student is selected. I was one of the six participants. There was a rival, whose name was Y___. He is in the second year and is beautiful, girlish and good at singing. But I wanted to win. So I paid more attention to the condition of my skin and improved my ability for singing at a karaoke box.

On the second day of the festival, “Miss Komaba” was held. We competed for the first prize and, after all, I lost Y___ was the winner. But all this event is a good memory for me.

3. 4. 2. 3. おわりに

昨年度のライティング指導について述べてきた。全部で20回前後の授業数で、書かせる前の下準備（口頭練習をして、言えるようになったものを書かせるなど）は決して充分であったわけではない。しかし、他方、書かせる内容によって、事前に資料を読ませたり、放送を聞かせたりして書かせるための動機づけは工夫したつもりであるし、書かせたあとは発表などへ結び

つける活動もした。要するに、「ライティング」といっても決して「書くこと」に限定されるのではなく、「読み、聞き、話す」という他の3技能と大きく関わっており、また関わらせることでより意味のある活動へ発展させることが出来るのである。

3. 4. 3. ライティング(50期) 担当: 寺田 恵一

高校3年「ライティング」の授業は週3時間の自由選択の講座であるが大半の生徒が取っている。筆者は週に1回担当した。高3は発展期に属し、シラバスは以下の通りである。

(a) パラグラフライティングとサマリーライティングの系統的指導—日常的な指導と休みの課題

(b) 生徒の創造性を高めるライティングの指導—スキットや英文俳句の創作

3. 4. 3. 1. 「ライティング」のシラバスの作成

上記の発展期のシラバスを念頭に置きつつ、1,2学期の授業のシラバス案を作成して、4月の最初の授業で生徒に配布し説明した。

高3ライティングシラバス案(寺田) 2001年度

1. コースの目的

和文英訳とパラグラフライティングを組み合わせた指導を行い、実践的ライティング能力を育成する。

2. コースシラバス

(1) 和文英訳

A. 文法項目別作文

1. 無生物主語(1)と(2) 2. 仮定法(1)と(2) 3. itの用法(1)と(2) 4. 比較 5. 主語の選定

B. 話題(トピック)別作文

1. 運動・スポーツ 2. 公害・事故・災害 3. 経済・貿易・政治(1)と(2) 4. 旅行・交通(1)と(2) 5. 健康・病気 6. 訪問・コミュニケーション

C. 機能別作文

1. 忠告 2. 提案

D. 天声人語

パラグラフライティングと日本的レトリックの比較

(2) パラグラフライティング

1. パラグラフライティングの実践課題①

(条件作文: 入試問題)

2. パラグラフライティングの基本①—

Spiral English WritingのLesson 45

3. パラグラフライティングの実践課題②

4. パラグラフライティングの実践課題③(入試問題)

5. パラグラフライティングの実践課題④(入試問題)

6. パラグラフライティングの基本②(原因・理由を述べる)—Spiral English WritingのLesson 47

7. パラグラフライティングの実践課題⑤

8. パラグラフライティングの実践課題⑥

(3) 語彙の形成

同義語、反意語、語根、接頭辞、接尾辞、カタカナ英語など

上記のシラバス案は、高校3年生にまとめた英文を書かせることを主な目標にしながらも、同時に大学入試を控えた時期であることを考慮して和文英訳を活用して文法力の養成もめざしている。以下、コースシラバス案に沿って、その構成について説明する。

3. 4. 3. 2. 和文英訳

コミュニケーションライティングの立場からすると、和文英訳には批判すべき要素が多く存在すると考えられる。小室(2001:p.20-22)は和文英訳の功罪を論じているが、筆者は和文英訳にもメリットがあるとの立場をとる。1学期には最初に文法項目別作文に取り組み、基礎的な文法力の養成に努めた。2学期には話題別(トピック別)作文や機能別作文に取り組み、やや応用的な作文力をつけることをめざした。天声人語の部分訳も行い、「まくら」や「起承転結」など日本の伝統的なレトリックを、パラグラフ・ライティングのlinearなレトリックと対比して説明した。

3. 4. 3. 3. パラグラフ・ライティング

文法項目別作文が終わった6月の初め頃から、パラグラフ・ライティングの指導に入った。作文の教科書を使用してパラグラフ・ライティングの基本を教えながら、実践的な課題に取り組みさせた。作文の課題は次の通りである。「私の好きな季節」、「選挙権を18歳に引き下げること」、「ボランティア活動への参加」、「高校生のアルバイトの是非」、「高校生の制服着用の是非について」(次の生徒の作品例(原文のまま)参照)、などである。

高校生の制服着用について

1. 賛成論

I like to wear the uniform. First, when we wear it, we feel that we are together and comfort each other. Second, if we wear it, we become polite because we know that other people will consider us as certain high school students. Third, of course we don't have to worry when we choose our cloths (clothes). For these reasons, I prefer to wear the uniform.

2. 反対論

I do not like to wear the uniform. First, it must be dirty, for we wear it every day. Second, all of us wear it, so we cannot express any personality. This means that we lose one of the greatest pleasure (pleasures) of our school lives. Third, we must be polite at any time because other people look us (look at us) as high school students. So we cannot relax. For these reasons, I prefer not to wear the uniform.

(()内の語は筆者が直した語)

3. 4. 3. 4. 語彙の形成

同義語、反意語、語根、接頭辞、接尾辞、カタカナ英語などについてプリントを作成して、投げ込み的な教材として活用した。たとえば、接頭辞については「反対」や「否定」を表すものを集めて関連する単語を紹介した。

3. 4. 4. ライティング(49期) 担当:久保野雅史

3. 4. 4. 0. 読者を特定したライティング活動

～卒業制作「英語で話す筑駒 Q&A」を通して～

3. 4. 4. 1. 発展期シラバスとの関連

発展期のライティング・シラバスは、

①パラグラフ・ライティングとサマリー・ライティングを系統的に学ぶ。

②創造性を生かした様々な内容のライティングを行う。である。ここでは、②に関する実践を報告する。ただし、この部分は 2000 年度の授業(毎週 1 時間)で行われたものである。

3. 4. 4. 2. 読者を特定したライティング活動

卒業制作『英語で話す「筑駒」Q&A ～Talking about Tsukukoma～』について報告する。これは、タイトルからも分かるように、講談社インターナショナルのバイリンガル・ブック『英語で話す「世界」Q&A』に触

発されたものである。

筆者は次年度に高校 1 年生を担当することが内定していた。そこで、4 月に入学する新高校 1 年生を読者に特定した「学校紹介冊子」を作るプロジェクトを思いついた。さらに、この原稿を基にしたスピーチを撮影し、そのハイライトを編集して『先輩が、英語で語る筑駒』と題するビデオを作成することも思いついた。このビデオは、4 月当初の授業時間に英語の教材として新入生に見せることになった。

このプロジェクトは、短期間で取り組んだ割には予想以上の成果を収め、各自が創造性を発揮した力作が多く寄せられた。成功の原因は、①読者を特定したこと、②スピーチ原稿の作成として位置づけたこと、などが考えられる。プロジェクトへの取り組みは、授業でプリントを配布して目的や手順を徹底した。

配布プリントの一部を引用する。

0 準備

『英語で話す「世界」Q & A』(講談社インターナショナル編)のスタイルを真似て『筑駒』に関する説明(行事・部活動・授業・何でも可、但し特定の個人を非望・中傷・揶揄するものは除く)を Q & A 方式で書く。

「1 分間スピーチ」の原稿を兼ねるため、分量は 100～120 語(Q の文含む)とする。

1 期日 最終授業

2 内容

- ①準備した原稿の内容を音声で聴衆に伝える。
- ②原稿(プリントアウト)を発表後に提出する。
- ③仲間の発表を集中して聞く。

※①②のどちらかでデジタルデータを提出する。出来れば①が望ましい。

- ①メールの本文で(添付は不可)久保野に送る。
 - ・本人が同定できるように本文冒頭にクラス
 - ・番号・氏名を明記する。

②FD(テキストファイル)で直接提出する。

次は、ある生徒の作品である。

Q: How can we tell Mr. Fukase and Mr. Miyazaki from each other?

In our high school, there are two teachers looking quite alike: Mr. Fukase and Mr. Miyazaki. When we see either of them for the first time, we

can hardly identify him. Actually, they have a lot in common.

For example, they both have been in charge of us, both have gray hair, both wear glasses, and both are very kind to us.

However, they are different persons after all. Mr. Fukase teaches Mathematics, and Mr. Miyazaki teaches history. Mr. Fukase's glasses are always about to fall from his nose, but Mr. Miyazaki's not.

Mr. Miyazaki puts his hands in his pocket and handles his keys making noise, but Mr. Fukase doesn't.

Anyway, they equally seem to love us, and we also love both of them.

自分を中学高校で担任してくれた二人の教師を、新入生に紹介している。言葉の端々に、恩師に対する感謝と母校に対する愛着が感じられる。

この原稿を基にしたスピーチも、愉快的仲間たち(2003)のDVDで紹介されている。興味のある方はご覧頂きたい。

4. シラバス全体のまとめ

1. で述べたように、シラバスに関する本プロジェクトは5ヶ年にわたるものとして計画されていた。ところが、プロジェクトの最終年度に該当する2002年度に、本校が文部科学省からスーパー・サイエンス・ハイスクールに指定されたため、それに合わせて急速研究テーマの変更が行われることになった(7.を参照)。

4技能すべてのシラバスをあらためて全体的に見渡して検討を加える最終年度が無くなってしまったので、ライティングのシラバスに関する報告をすると同時に、シラバス全体のまとめもここで簡単に行うことにする。

まず、2000年から2003年までに発表された本校のシラバスを4技能すべて提示すると以下ようになる。

4. 1. リスニングのシラバス(2000年発表)

4. 1. 1. 基礎期(中学1・2年)

- (1)母音や子音が聞き分けられる
- (2)単語レベル・文単位の聞き取りができる
- (3)身近な事柄についてのまとまった文章の要点を聞き取ることができる

4. 1. 2. 実践期(中学3・高校1年)

- (1)まとまりのある内容(対話、物語、スピーチなど)

の概要・要点を聞き取る。

- (2)聞き取りながらメモをとったり、自分の意見や考えなどを相手に伝える。
- (3)ニュースや映画など、初歩的な「本物の素材」(authentic materials)にふれる。

4. 1. 3. 発展期(高校2年・3年)

- (1)「本物の素材」(authentic materials)に触れ、英語の量・スピードに慣れる。
- (2)やや高度な内容を聞き、その概要・要点を述べる。
- (3)聞き取った内容に対して自分の意見を述べる。

4. 2. スピーキングのシラバス(2001年発表)

4. 2. 1. 基礎期(中学1・2年)

- ・個々の発音・連音・リズム・イントネーション(基本)
- ・綴りと発音の関係(フォニックス)
- ・絵や物をヒントにしたoral reproduction (show&tell, story telling)
- ・身近なことがらを英語で説明(自己紹介など)

4. 2. 2. 実践期(中学3・高校1年)

- ・リズム・イントネーションの効果的な使い方(応用)
- ・様々な形式による口頭発表(recitation, speech, skit)
- ・より内容のある事柄を英語で伝える(体験談、興味のあることの説明等)

4. 2. 3. 発展期(高校2年・3年)

- ・より高度な内容を英語で伝える
- ・自分の考えが相手に正確に伝えられる
- ・意見交換ができる(discussion, debate)

4. 3. リーディングのシラバス(2002年発表)

4. 3. 1. 基礎期(中学1・2年)

(a)題材

- ・身近で具体的な内容の事実文・説明文と対話文

(b)活動

①読解

- ・文字通りの理解(literal comprehension: read the lines)
- ・文(sentence)の基本構造を理解し、文単位の意味を正確につかむ。

②音読

- ・語句や文を正しい発音・リズム・抑揚で音読する。

4. 3. 2. 実践期(中学3・高校1年)

(a)題材

・やや抽象的な内容の事実文・説明文、及び易しい物語・小説等

(b)活動

①読解

・推論的理解 (inferential comprehension: read between the lines) をすすめる

・段落 (paragraph) の構造を理解し、文章 (passage) の概要・要点をつかむ。物語の登場人物の性格・心情等を読みとる。

②音読

・理解した内容が表現されるように音読する

4. 3. 3. 発展期(高校2年・3年)

(a)題材

・様々なスタイルの、精神年齢に応じた内容の文章

(b)活動

①読解

・評価的理解 (evaluative comprehension: read beyond the lines) をすすめる。

・複雑な内容・構造の文章 (passage) を正確に精読する。

・斜め読み (skimming)、走査読み (scanning) 等の読みの技術を身につける。

・読みの速度を上げ、限られた時間でより多量の文章の概要・要点をつかむ。

②音読

・文章の内容に応じて適切に音読する。

・表現読み (oral interpretation) 等の活動を通してスピーキング力も伸ばす。

4. 4. ライティングのシラバス(2003年発表)

4. 4. 1. 基礎期(中学1・2年)

(a) 綴り字と発音の関係 (フォニックス) を指導する
スペリングでつまづく生徒が数多く存在することを考えると、フォニックス等を取り入れて、綴り字と発音の規則性のある関係に注目させたい。

(b) 文レベルの指導

語順---平叙文、疑問文、命令文などにおける語順に注目させたい。

(c) まとまった文を書かせる

自己紹介、家族の紹介など。

4. 4. 2. 実践期(中学3・高校1年)

(a) 2文以上書く練習

文と文のつながりに注目させ、連結詞 (connectives) の指導を行う。

(b) まとまった文を書かせる

日記、手紙、学校行事の感想文など。教科書や会話のテキストをもとに簡単なオリジナルのスキットを書かせる。

(c) 論理的な文章を書かせる

パラグラフライティングの基本の指導。

(d) アウトラインをまとめて書かせる

サマリーライティングの基本の指導。

4. 4. 3. 発展期(高校2年・3年)

(a) パラグラフライティングとサマリーライティングの系統的な指導

日常的な指導と休みの課題。

(b) 生徒の創造性を高めるライティングの指導

スキットや英文俳句等の創作。

4. 5. 問題点と改訂

本来、この4年間で行ってきた授業実践の結果をもとに上記のシラバスを全体的な視点から検討を加え、必要に応じて改正を加える必要があるのだが、すでに次のテーマの研究プロジェクトが発足しており、そのための十分な時間と機会が確保できない。

しかしながら、4. 1. から 4. 4. のように4つの技能を並べてみると、表記、用語、視点などが明らかに不統一であり不自然である。長期間にわたって作成されたことによってこのように不統一になってしまったのだが、ここままでは問題である。

そこで、ここではシラバスの内容に関しては基本的に手を加えず、表記等の不統一な箇所には修正を加え、全体としてのバランスを整えるにとどめることにする。

統一する際のポイントは以下の通りである。

- ・4技能間で用語の表記を統一する。
- ・用語に関して日本語と英語の併記はしない(簡潔に表記するため日本語のみにする)。
- ・文末の「○○する」「○○できる」「○○できるようになる」などの表記は「○○する」で統一する。
- ・「○○させる」「○○を指導する」のような教師の視点からの表記は行わず、すべて生徒の視点からの記述にする。
- ・具体例に相当する記述は削除する(記述を簡潔にする)

るため。また、挙げられている例が代表的な例とは考えられないものが多いため)。

・シラバスから解説や感想に類するものは排除する(例えば「スベリングでつまづく生徒が数多く存在することを考えると、(中略)に注目させたい。」という記述はシラバスそのものではない)。

・リーディングにだけ「題材」が示されているが、指導内容に於ける題材の重要性はリーディングに限ることではないので、題材の記述はすべて削除する。

・フォニックスがスピーキングとライティングの両方に挙げられているが、スピーキングではスピーキングの視点から、ライティングではライティングの視点からフォニックスについて言及する。

5. シラバス(改訂版)

4. 5. で述べたことをもとに修正を加えたシラバスを以下に示す。なお、この改訂後のシラバスは 2002 年 11 月 29 日に本校で行われた第 29 回教育研究会で発表された。

5. 1. リスニングのシラバス(改訂版)

5. 1. 1. 基礎期(中学1・2年)

- (1)母音や子音を聞き分ける。
- (2)単語単位・文単位で聞き取る。
- (3)身近な事柄についてのまとまった文章の要点を聞き取る。

5. 1. 2. 実践期(中学3・高校1年)

- (1)まとまった内容の概要・要点を聞き取る。
- (2)聞き取りながらメモをとったり、自分の意見や考えなどを相手に伝える。
- (3)本物の素材のうち、初歩的なものに触れる。

5. 1. 3. 発展期(高校2年・3年)

- (1)本物の素材に触れ、英語の量・スピードに慣れる。
- (2)やや高度な内容を聞き、その概要・要点を述べる。
- (3)聞き取った内容に対して自分の意見を述べる。

5. 2. スピーキングのシラバス(改訂版)

5. 2. 1. 基礎期(中学1・2年)

- (1)個々の発音・連音・リズム・イントネーションの基本に慣れる。
- (2)綴りと発音の関係を学び、綴りを見て正確に発音する力を身につける。
- (3)絵や物を用いた簡単な口頭発表を行う。

- (4)身近なことからを英語で説明する。

5. 2. 2. 実践期(中学3・高校1年)

- (1)リズム・イントネーションの効果的な使い方を身につける。
- (2)様々な形式による口頭発表を行う。
- (3)より内容のある事柄を英語で伝える。

5. 2. 3. 発展期(高校2年・3年)

- (1)より高度な内容を英語で伝える。
- (2)自分の考えを相手に正確に伝える。
- (3)ディスカッションやディベートで意見の交換をする。

5. 3. リーディングのシラバス(改訂版)

5. 3. 1. 基礎期(中学1・2年)

- (1)文字通りの理解を行う。
- (2)文の基本構造を理解し、文単位の意味を正確につかむ。
- (3)語句や文を正しい発音・リズム・抑揚で音読する。

5. 3. 2. 実践期(中学3・高校1年)

- (1)推論的理解を行う。
- (2)段落の構造を理解し、文章の概要・要点をつかむ。
- (3)物語の登場人物の性格・心情等を読みとる。
- (4)理解した内容が表現されるように音読する。

5. 3. 3. 発展期(高校2年・3年)

- (1)評価的理解を行う。
- (2)複雑な内容・構造の文章を正確に読みとる。
- (3)斜め読み、走査読み等の読みの技術を身につける。
- (4)限られた時間で多量の文章の概要・要点をつかむ。
- (5)文章の内容に応じて適切に音読する。
- (6)表現読み等の活動を通してスピーキング力の向上へとつなげる。

5. 4. ライティングのシラバス(改訂版)

5. 4. 1. 基礎期(中学1・2年)

- (1)綴り字と発音の関係を学び、正確な綴りで書く力を身につける。
- (2)語順に注目し、文単位での書く練習を行う。
- (3)簡単で日常的な内容のまとまった文章を書く。

5. 4. 2. 実践期(中学3・高校1年)

- (1)文と文のつながりに注目し、2文以上を書く練習を

行う。

(2)まとまった文章を書く。

(3)パラグラフ・ライティングの基礎を学び、論理的な文章を書く。

(4)アウトラインを作成し、それをもとに文章を構成する。

(5)基本的なサマリーライティングの練習を行う。

5. 4. 3. 発展期(高校2年・3年)

(1)パラグラフライティングとサマリーライティングを系統的に学ぶ。

(2)創造性を生かした様々な内容のライティングを行う。

6. 今後の課題

改訂版のシラバスは現時点での最新版ということになるが、これが決定版ということではない。今後、このシラバスが有効なものであるかどうかを、日々の実際の授業の中で、そして、長い時間をかけて、検証していくという課題が残っている。

そこで最後に、シラバスの有効性の検証という観点から、今後の課題について考えてみたい。

6. 1. 4技能の有機的な結びつき

これまで4年間の間に、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの順で1つずつの技能に関するシラバスの検討を行ってきた。しかし、実際の授業では4つの技能を同時にバランスよく指導するはずである。高校では「オーラル・コミュニケーション」「リーディング」「ライティング」のように特定の技能に重点をおいた授業もあるが、生徒は複数の授業を受けることを通して4技能全体を伸ばすことになる。したがって、基礎期、実践期、発展期のそれぞれにおいて、4つの技能が有機的に結びつくようにシラバスが設計されているかどうかという点を十分に検討しなければならない。

この検討は、4技能すべてのシラバスが出揃った時に可能になるので、まさにこれからの検討課題であると言えよう。

6. 2. 縦断的な検証

これまでの実践報告はすべて横断的な割り振りでなされてきた。例えば、2000年のスピーキング・シラバスの授業実践に関しては、

中学1年の授業実践：53期生対象

中学2年の授業実践：52期生対象

中学3年の授業実践：51期生対象

高校1年の授業実践：50期生対象

高校2年の授業実践：49期生対象

高校3年の授業実践：48期生対象

という組み合わせで報告された。単に授業の具体例を示すだけであればこれでよいのかもしれないが、シラバスの有効性を検証するには、ある年の入学生から6年間を通して追跡調査を行わなければならない。つまり、縦断的な視点での検証が必要だということである。しかし、これには6年間という長い時間がかかる。検証は容易ではないが、だからといってこの検証を行わないわけにはいかない。

6. 3. 最終的な到達目標が明確になっているか

ここまで、「シラバスの有効性の検証」について述べてきたが、そもそも「シラバスが有効である」とはどういうことであろうか。そして、どのような結果ができれば「検証された」(あるいは「反証された」)と言えるのだろうか。

シラバスには基礎期、実践期、発展期のそれぞれの到達目標が示されている。シラバスに沿って各期の到達目標を実現していけば、高校卒業時に生徒の英語力があるべき状態になっているとすれば、「そのシラバスは有効である」ということが「検証された」ということになる。

一方で、シラバスのどこかに問題があり、シラバスの流れに沿って学習を進めていくことが不可能であることがわかったり、最終的に生徒の英語力があるべき状態にならないことが明らかになったら、そのシラバスは「有効ではない」ということになる。

したがって、シラバスの有効性を検討する際にポイントとなるのは、「生徒の英語力の最終的な到達目標」だということになる。これが明らかにならなければ、シラバスの有効性を問うことができない。

しかし言うまでもなく、「生徒の英語力の最終的な到達目標」はシラバスを設計する際に最初に検討されたはずの問題である。シラバス研究に関する報告をいったんここで閉じることになるが、報告の最後になって、もう一度最初の根本的な問題について問い直さなければならないということである。

7. 次年度の研究プロジェクト報告について

すでに述べたように本校は2002年度に文部科学省からスーパーサイエンス・ハイスクールに指定された

(研究指定は3年間)。それに伴い、英語科の研究プロジェクトは、

①数学や科学を内容とする英語による発表能力を身につけさせる。

②数学や科学に関する内容の教材を作成しカリキュラムを検討する。

という2つをテーマとすることとなった。この研究プロジェクトに関しては次年度の紀要で報告される予定である。

なお、本校全体のスーパー・サイエンス・ハイスクールとしての取り組みは、

<http://home.catv.ne.jp/dd/tukukoma/hp/>
に逐次最新の内容が報告されている。

【注】

本稿の執筆担当は以下の通りである。

3.1.1. 寺田

3.1.2. 加藤

3.2.1. 久保野

3.2.2. 平原

3.4.1. 末岡

3.4.2. 八宮

3.4.3. 寺田

3.4.4. 久保野

上記以外の箇所 末岡

【参考文献】

- Byrn, D. (1991). *Teaching Writing Skills*. Longman.
- Connor, U. (1997). *Contrastive Rhetoric*. Cambridge University Press
- Grabe, W. & Kaplan, R.B. (1996). *Theory and Practice of Writing*. Longman.
- Hatori, H., Itoh, K., Kanatani, K. and Noda, T. (1990) *Effectiveness and limitations of instructional intervention by the teacher --- writing tasks in EFL ---*. 昭和63年—平成元年度文部省科学研究費補助金研究.
- Kanatani, K., Itoh, K., Noda, T., Tono, Y., and Katayama, N. (1993) *The Role of Teacher Feedback in EFL Writing Instruction*. 平成3年—平成4年度 文部省科学研究費補助金研究.
- Kroll, B. (1991). *Second Language Writing*. Cambridge University Press.

久保野雅史(2002a)「私の授業：口頭練習の徹底か

ら創造的表現活動へ～『有名人架空インタビュー』に向けて～』『英語教育』2002年10月号 大修館書店
久保野雅史(2002b)「中学校英語科の基礎・基本(3)」

『指導と評価』2002年12月号 図書文化社

小林昭江(1994)『ライティングの指導』(英語教師の四十八手6) 研究社出版

小室俊明(2001)『英語ライティング論』 河源社

竹林滋(1994)『英語のフォニックス』 ジャパンタイムズ

手島良(1997)『スラすら・読み書き・英単語』 NHK出版

ハイルマン, A.W., 松香洋子監訳(2000)『フォニックス指導の実際』 玉川大学出版部

橋内武(1995)『パラグラフ・ライティング入門』 研究社出版

松香洋子(2000)『英語、好きですか』 読売新聞社
愉快的仲間たち(2003) *Six-Way Streets* (仮題), パンブルビー

"Interview with Steven Spielberg, An," *Unicorn English Course I*, 文英堂

『英語で話す「世界」Q&A』 講談社インターナショナル